3　西上免古墳を巡る２つの問題

ここでは西上免古墳に見られた様々な特徴の内で特に興味深い２つの点に関して問題点をまとめておくことにしたい。まず第１に西上免古墳の規格性と墓域について、第２に出土土器に見られる特徴。

規格性と墓域

まず規格性であるが、西上免古墳の墳丘プランの特徴は以下のようにまとめることができる。まず第１に前方部長が後方部の0.64：１で約2/3に達するものである。第２に前方部側面の延長が後方部中心点付近で結束する。第３に後方部はほぼ正方形を呈する。第４に周溝は前方後方形を志向し、10ｍほどの幅広い溝が巡る。第５に区画溝によって墳丘・周溝が規制される。こうした特色の内で、１から３の特徴は前方後方墳の墳形プランそのものの属性を示しているものであり、第４の周溝の形態と併せて前方後方墳の墳形の発展段階を考える上で興味深い事例といえよう。そして第５の区画溝の問題は墓域に存在する諸問題を表面化させる象徴的な遺構と考えたい。そこで前者の墳形規格の問題と後者の区画溝とその規制の問題と２つに大きく区分して問題点を整理しておきたい。

墳形　　墳形は廻間遺跡SZ01との対比において明らかであるが、前方部の発達がまず上げられる。そしてそれは後方部の一辺の規模を基軸にして導き出される傾向がある。そこで東海地域の墳丘墓の主墳の規模をまず問題にしたい。結論的には大きく３つに区分しておいた*。まず７～10ｍ、11～13ｍ、そして15ｍ以上である。９ｍを中心とする小規模なもの、11と13ｍにまとまる中規模なもの、そして15.16ｍのやや規模の大きなものであり、20ｍクラス以上にはＢ３型が見られる。西上免遺跡ではSZ01が後方部で一辺25ｍ、SZ02とSZ04が15.16ｍの規模の大きな墳丘墓に含まれ、SZ05やSZ03は小規模な墳丘墓となる。小規模な墳丘墓については三重県松阪市草山遺跡でも明らかであるが、墳形がＢ型墳にならないものが多々認められ、Ｂ型墳の特質の一つを垣間みることができる。つまり共同体墓の中では中規模墳以上に、Ｂ型墳が採用される傾向がある。さて西上免古墳は25ｍの主墳規模をもつが、その後方部の大きさを３当分にして考えると、全長は前方部長が1/3であれば33ｍ前後になり、2/3であれば41ｍ前後になり、1/1であれば50ｍ規模となる。因みに1/2であれば37.5ｍとなる。Ｂ３型からＣ型墳への画期とした、墳長がおおむね35ｍ以上という数値はこうして導き出すことも可能である。これはかつて前方後方墳の規模を問題にしたときの35ｍ以上で50ｍ未満の前方後方墳を小型墳として位置づけた数値にも繋がる**。すなわち約30

Ｂ３型

Ｃ型墳
前方後方墳

*赤塚次郎1992「東海のＢ型墳」『東海大学校地内遺跡調査団報告３』
**赤塚次郎1989「前方後方墳覚書」『考古学ジャーナル』307

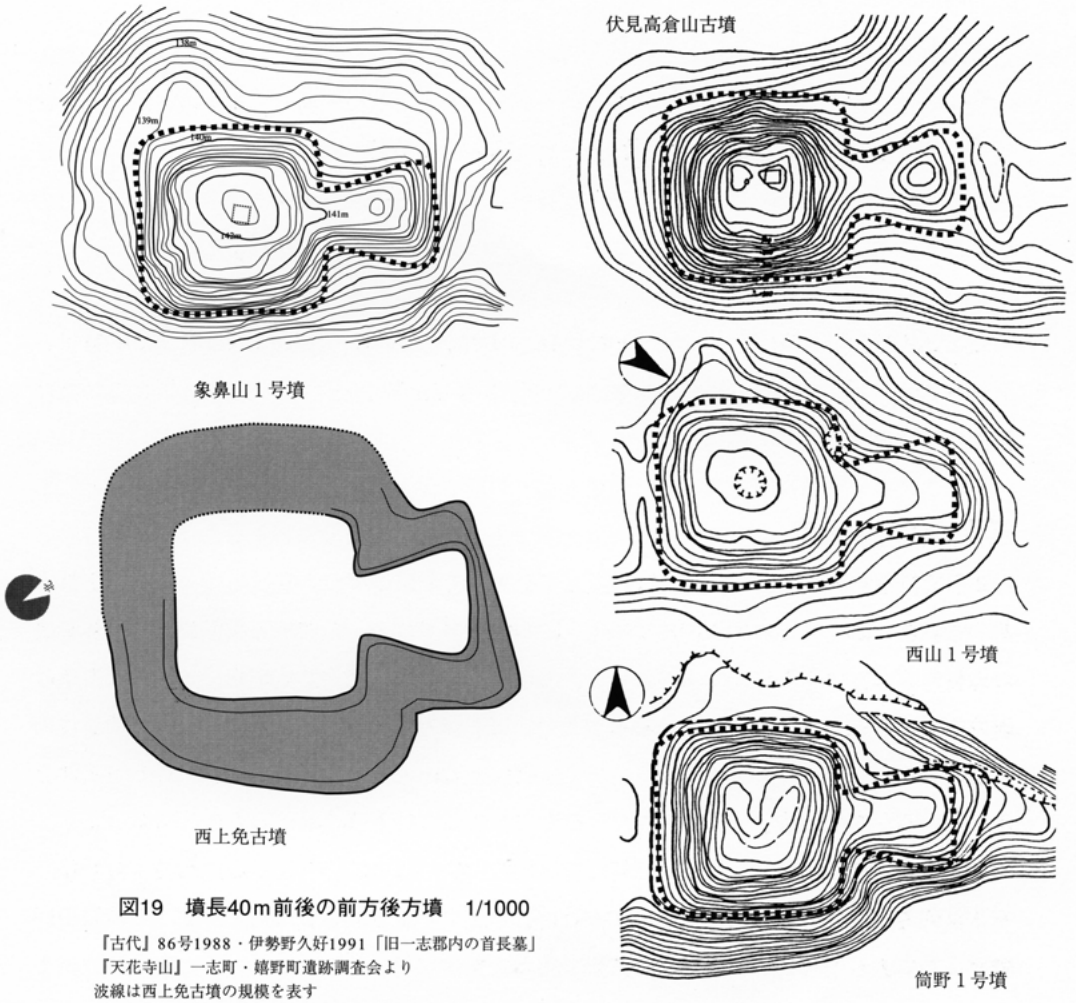

図19　墳長40ｍ前後の前方後方墳　1/1000

『古代』86号1988・伊勢野久好1991「旧一志郡内の首長墓」
『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会より
波線は西上免古墳の規模を表す

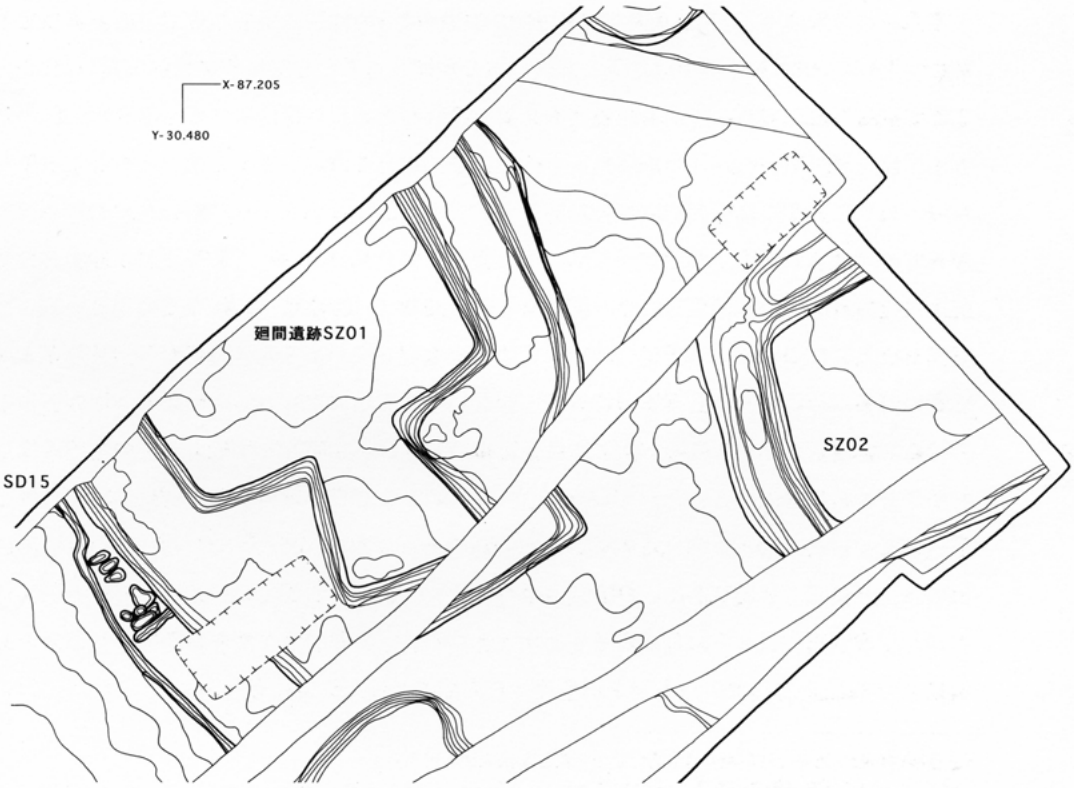

図20　廻間遺跡SZ01前方後方型墳丘墓　1/400

m以上の墳長をもち前方部が後方部の1/2以上に達するものを前方後方墳*と呼び、最古の前方後方墳をこうした規模（小型墳）の中に求めようとするものである。西上免古墳はまさにこの数値の範囲内に収まる。さらに東海地域に点在する初期の前方後方墳を上げてみると、まず岐阜県では養老町の象鼻山1号墳が主墳長25m前後で40m弱の規模をもつ。また御嵩町の伏見高倉山古墳は主墳が24.5mで墳長41.5m、同じく可児市の東寺山1号墳は主墳が26mで墳長は推定で40mほどとされている。尾張地域では大口町の白山1号墳が主墳を25mとして墳長50m弱が考えられる。伊勢地域では西山1号墳がはやり主墳を24mで墳長が43.6mと報告されている。その他で後方部を25mと考えるものが多く散見できる**。そこには一定の規則性が存在すると考えることができよう。つまり廻間Ⅰ式から廻間Ⅱ式期にかけての共同体墓における盟主的な墳丘には、C型墳としての前方後方墳が位置づけられ、主墳長として25m前後が、そして前方部を2/3で40m前後とし、1/1で50m前後とするような規則性が存在する。発展段階としては前者が後者より先行することになるが、また40m前後の前方後方墳が統計的にも主体を占めるわけであり、これらの多くは西上免古墳と類似する共同体墓内の造営原理を内包するものであろう。そしてさらに隔絶性の高い特定墓は、規模的にもより優位な条件を満たしているものと推察したい。例えば大垣市の高塚山古墳や松本市の弘法山古墳である。

前方後方墳

区画溝　　弥生時代の共同体墓には墳丘墓を溝によって区分するものが存在する。例えば朝日遺跡ではすでに弥生中期前葉段階の事例にさえ認められる。また同じく朝日遺跡では中期の大型墳丘墓にも溝によって区画された形跡が見て取れる。こうした溝の機能はもちろん一律に考えることはできないものの、その主たる機能が墓域内の目的的な区画である点は容易に推測できる。西上免遺跡でのSD25・SD19はその延長に位置づけて考える事は許されよう。さらに西上免古墳ではこうした溝による規制とも思える現象が各地点で見られた。まず前方部の周溝のプランであり、西周溝北隅の溝幅の縮小、さらに前方後方墳そのものの前方部先端・後方部北西端部の形態にもその影響が認められる。こうした状況はむしろ西上免古墳がもつ墳丘墓造営原理の限界性を考えさせるものである。つまり共同体墓における前方後方墳の問題点である。共同体から隔絶・遊離した墳丘墓ではなく、あくまで一般集落内に留まる前方後方墳の造営が、集落の墓域での約束事の中に埋没し、主墳25mの規模をもつ前方後方墳としての階層的規範との矛盾がここに表面化しているものと考えたい。したがってそこには共同体から遊離しえない、いや、しない主体者層の存在と、その墓制のあり方が投影されているものと思われる。すでに西上免古墳と相似形規格を有する前方後方墳が濃尾平野・伊勢湾沿岸部には普遍化している可能性が高い。なぜならば西上免遺跡は濃尾平野内に点在する一般的な集落遺跡にすぎない存在であるからである。こうした規格性の受容、階層性の体現が主たる目的として、前方後方墳の造営が位置づけられていたものと考えたい。そこに、伝統制に裏打ちされた墓域設定を大きく踏み外してまでも、造営を行う余地はほとんど残っていない。

共同体墓

*本来では35m前後が妥当と思われるが、一応30mから35mを一つの目安と考えたい。
**三重県嬉野町の筒野1号墳（約40m弱で後方部は27mほど）、愛知県佐織町の奥津社古墳（一辺25m）など

土器の特徴

朱彩土器　　西上免古墳から朱が塗布された土器が数点出土している。壺においてはほぼ外面全体に塗布されており、高杯では杯部内面をも朱彩痕跡が見られる。こうした朱彩土器がいつごろから認められるものなのかは、今までの調査事例を再検討する必要があるが、濃尾平野では朱の使用という点から考えてみると興味深い資料が3・4世紀には散見できる。まず従来からの視点に基づくと、古墳の副葬品の中に朱に関係する文物が存在する。石臼・石杵と称されるもので、矢道長塚古墳や岐阜瑞龍寺山第3支群1号墳から出土している。さらに近年では大垣市東町田遺跡SZ02のB2型墳丘墓からも石臼の出土が報告されている*。共伴する土器は廻間Ⅲ式前半期に所属するものであった。また愛知県一宮市北道手遺跡SK55からは、内面には朱が、外面には煤が付着した朱を精製したと思われる鉢が出土しており、廻間Ⅱ式期に所属する**。さらに三重県鳥羽市白浜遺跡では把手付鉢が数点出土している。実見した結果、外面には煤が付着し、内面には朱と思われる痕跡が見られた***。まさに北道手遺跡と同様な資料と考えて良いものと思われる。因みに一宮市北道手遺跡は調査範囲においては土坑群が点在し、廻間Ⅰ式からⅡ式期にかけて継続的に祭祀行為を行った空間と考えられている。それも水際・水辺の祭祀と報告されている。それは集落に近接する非日常的な場を提示してるようでもある。西上免古墳には器台が見いだせないが、北道手遺跡には器台・小型土器が一定量共伴している。また小型土器に朱の痕跡が見られる資料は一宮市門間沼遺跡などにも散見でき、どうやら3世紀から4世紀前半期には集落内・墳墓で普遍的に朱を使用したことが分かる。それは墳墓・祭祀において特に顕著に見られる傾向がある。少なくても濃尾平野・伊勢湾沿岸部には廻間Ⅱ式期以降では普遍的にそうした行為が行われていた可能性が高い。この点は弥生時代後期から古墳時代初頭には日本列島内において朱の使用が飛躍的に増加し、画期が存在する点と呼応するようでもある****。西上免古墳の朱彩壺・高杯が後方部の墳長に配置されていた可能性が高いのであり、あるいは墓壙内祭祀とされる場で使用されていたものかもしれない。そうした墳墓での朱の使用という点において興味深い現象である。朱彩土器・朱精製土器・朱壺そしてその関連石製品・木製品など、多様な専用・転用品を使用した施朱行為が、地域性を帯びて顕在化しつつある時代と考えられる。B型墳から前方後方墳への変化の中にもこうした動きが看取できる点を指摘したい。

朱の使用

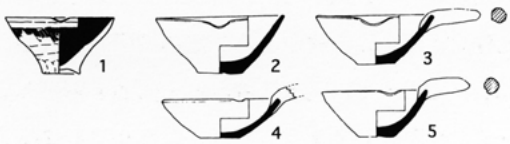

図21　朱を精製した鉢　1/8
1：北道手遺跡（一宮市）　2～5：白浜遺跡（鳥羽市）報告書より

*鈴木　元1996「大垣市昼飯町東町田遺跡の石臼について」『美濃の考古学』創刊号
**高橋信明編1996『北道手遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第67集
***『白浜遺跡発掘調査報告』1990本浦遺跡群調査委員会　図版81
****北條芳隆1992「葬送儀礼における朱と石臼」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2冊

東海系加飾壺

東海系加飾壺についてはその見通しを整理したことがある*。ここでは特にその内でⅡb類とした加飾壺を中心にまとめていきたい。西上免古墳では138の資料がこれに相当する。結論的にはこうした形態の壺は、まずパレス壺の系統の内でA5型式（廻間遺跡）としたものをベースに伊勢地域に点在する体部上半に複数の波状文を施す加飾広口壺の融合によって生み出された形態と考えたい。因みにパレス壺の口縁端部の拡張内側に粘土を補充するものは廻間Ⅰ式段階であり、基本的には廻間Ⅱ式期のものにはこの技法が欠損する。Ⅱb型式の口縁端部の形状を考える場合にはこうした時期的な背景も考慮する必要がある。さらに加飾二重口縁壺や底部穿孔（焼成後）といった形態と属性が西上免古墳にはすでに用意されている点は注目したい。なぜならば廻間Ⅱ式からⅢ式にかけて東日本地域の墳丘墓・前方後円（方）墳には底部穿孔二重口縁壷の使用頻度が高いからである。

加飾壺ⅡB

ところで西上免古墳から出土した土器が廻間Ⅱ式前半期を中心としている点は以下の点において大変重要な意味をもつ。つまり第１次拡散期とした廻間Ⅰ式４段階からⅡ式期１段階に始まったダイナミックな東海系文物の移動によってもたらされた土器の様相に直接符号する資料であるからである。必然的にこの時期の墳丘墓には、東海系土器ないしその影響下によって生み出された土器が多用される。まず注目されるのが、長野県弘法山古墳であろう。弘法山古墳から出土した土器には東海系の高杯や手焙形土器、さらには加飾壺が含まれている**。加飾壺はパレス壺と「畿内系」の壺と称されていたものが含まれる。西上免古墳の朱彩土器である138の資料と弘法山古墳の加飾壺は同型式の壺であるが、前者の体部がやや算盤玉形を呈しているのに比べ弘法山古墳は球形を呈し、編年的に後出である点は容易に推測できる。そこで他の高杯等の資料を含めて総合的に考えてみると廻間Ⅱ式３段階を著しく下降させる資料は見あたらないものと判断できよう。高杯脚部の直線化は前節でも記述したような濃尾平野北部域の様相をそのまま持ち込んだものと考えて良いものと思われる。したがって廻間Ⅱ式２段階を中心とした資料に併行する可能性が高い。千葉県木更津市の高部32号墳***からは東海系の高杯が出土しているが、その形態的な特徴は廻間Ⅱ式１段階の資料を下降させる要素は見あたらない。一部の資料にはⅠ式４段階に近い形態的な特徴を見いだせるものさえある。さらに佐倉市臼井南遺跡からは周溝内に落ち込んだ２点の加飾壺が出土している****。その内の１点には口縁部外面に櫛描きの波線文が見られ、さらにパレス壺に良く見られる擬凹線も確認できた。壺の体部上半には横線文と波状文が組合、その下部には貝殻刺突による列点文が施されている。底部には焼成後の円孔が見られ、西上免古墳と同様に丁寧な穿孔である。口縁部の形態を含めて西上免古墳出土138の資料と同系列の加飾壺と考えられる。また同じ墳丘墓からは東海系の器台１点も出土している。器台の形態は廻間Ⅱ式後半期の特徴をもつものであり、墳丘墓の下限を考える手がかりになろう。138の資料を手がかりに同様な形状をもつ資料はこの他にも神門古墳群等でも見られ、廻間Ⅱ式期を中心として広範囲に分布する点は容易に確認できる。そこには東海系という土器群に象徴されるような伊勢湾沿岸部の文化的な影響が色濃く見い出せる。

第１次拡散

---

*赤塚次郎1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』７

**『弘法山古墳出土遺物の再整理』1993松本市文化財調査報告no.111　資料の実見には直井雅尚氏にご配慮賜った。

***小沢　洋1995「高部古墳群」『前期前方後円墳の再検討』第38回埋蔵文化財研究集会

****『臼井南』1975佐倉市教育委員会　資料の実見には高橋誠氏にご配慮賜った。

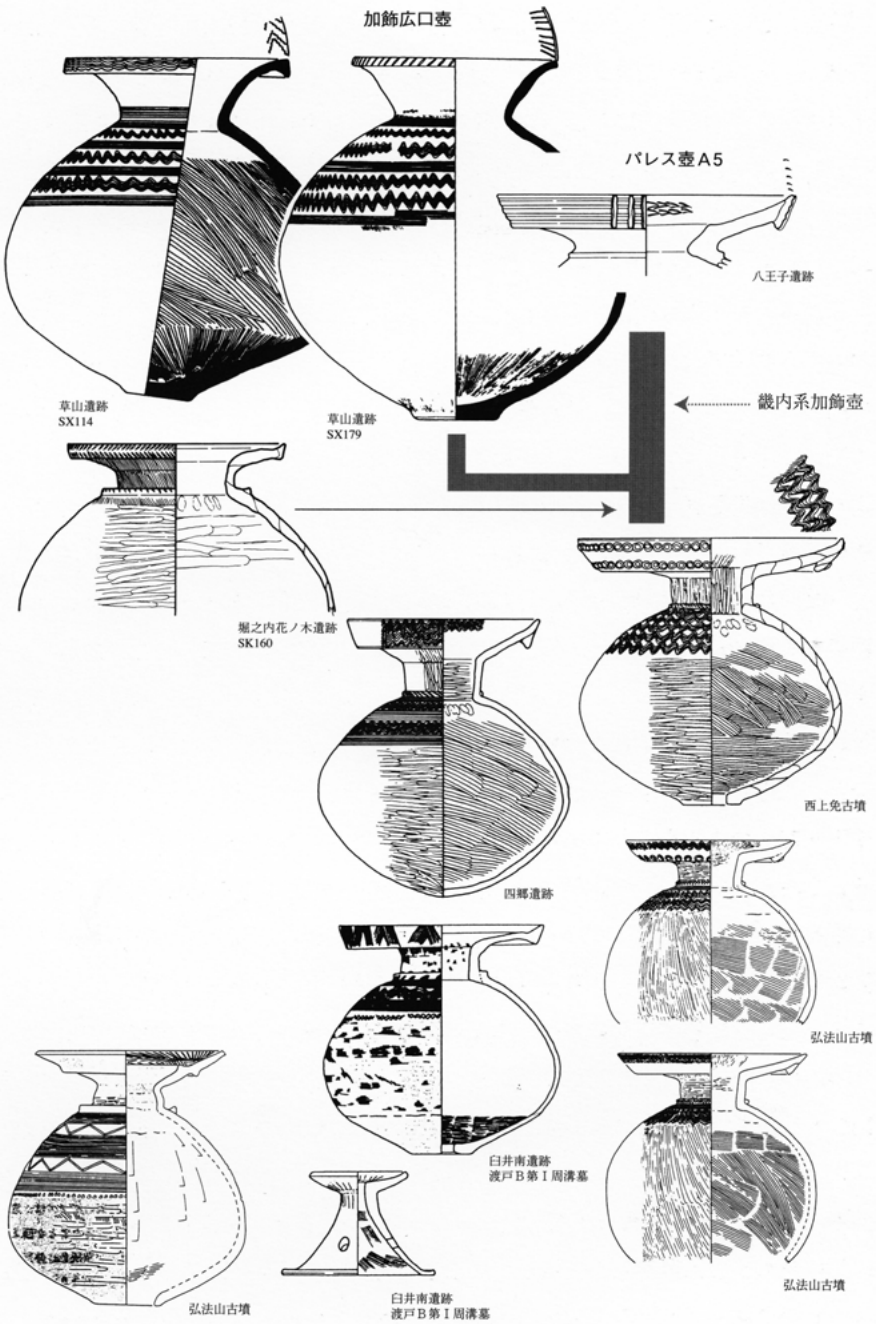

図22　東海系加飾壺　1/6

長野県弘法山：『弘法山古墳出土遺物の再整理』1993松本市文化財調査報告no.111
千葉県臼井南遺跡：『臼井南』1975佐倉市教育委員会
岐阜県四郷遺跡：赤塚次郎1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7
三重県草山遺跡：1983『草山遺跡発掘調査月報』